

ディケンズの演劇活動 “The Lighthouse” の上演

西條 隆 雄

1 テキストの在処

Dickens が素人演劇活動に打ち込んだことはよく知られている。演技および采配はプロに匹敵するといわれる。役者としてはもちろん、舞台監督としても練習の時間厳守から舞台装置の段取りにいたるまで手抜きはなく、稽古のときはメモ用紙が頻繁に飛び、台詞や場面が冗長であれば、自らこれに手を入れてカットし、逆の場合は加筆を施して、脚本のドラマ性を高めている。ディケンズの巡業に参加した俳優 Mrs. Compton (Miss Emmeline Montague) は「彼といっしょに演じると、どのような緊急事態が起ころうと、これに対応しうる手際と能力を持ち、任せきることのできる俳優が自分の脇にいると感じる」と述べているし、また、彼女の夫でこれまた俳優である Henry Compton (1805-1877) は「もしディケンズが舞台を職業としていたならば、彼は間違いなく舞台に名声と幸運を打ち立てていたであろう」と述べる¹。

役者として、また監督としての秀逸さは、ディケンズの長年にわたる素人演劇活動にありありと見える。素人演劇活動とはいっても、単なる場当たりのな関心事ではなく、新聞・雑誌に高評が掲載される公演であり、小説執筆に専念するのと同じくらいに情熱を傾けた芸術活動であった。彼が演じた脚本および配役の一覧表は次ページの通りである²。

1833年に友人と家族を中心とする小グループで演じたのを皮切りに、1842年にはモントリオールで駐屯隊の人々といっしょに慈善目的の公演を行い、以後慈善目的や文芸基金作り

CHARACTERS PLAYED BY DICKENS IN AMATEUR THEATRICALS

Arranged in order of the dates on which he first played the parts listed.

	Character	Playwright	Piece	Category
1833	Rolamo, Farmer	Payne/Bishop	<i>Clari, the Maid of Milan</i>	Light Opera
1833	Sir Charles Courtall	O'Callaghan	<i>The Married Bachelor</i>	Comedy
1833	Wing, a Poor Country Actor	R. B. Peake	<i>Amateurs and Actors</i>	Mus. Farce
1842	Alfred Highflyer	Morton	<i>A Roland for an Oliver</i>	Comedy
1842	Gallop	J. Poole	<i>Deaf as a Post</i>	Farce
1842	Mr. Snobbington	(from French)	<i>Past Two O'Clock in the Morning</i>	Farce
			(This last piece was afterwards billed as <i>Two O'Clock in the Morning</i> , then as <i>A Good Night's Rest</i> by Mrs. Gore.)	
1845	Captain Bobadil	B. Jonson	<i>Every Man in his Humour</i>	Comedy

1845	Eustace	Fletcher	<i>The Elder Brother</i>	Comedy
1846	Sir Flippington Miff	Peake	<i>Comfortable Lodgings, Farce or Paris, in 1750</i>	
1847	Jeremiah Bumps	J. Poole	<i>Turning the Tables</i>	Farce
1848	Justice Shallow	Shakespeare	<i>The Merry Wives of Windsor</i>	Comedy
1848	Flexible	Kenney	<i>Love, Law and Physic</i>	Farce
1848	The Doctor	Mrs. Inchbald	<i>Animal Magnetism</i>	Farce
1851	Lord Wilmot	Bulwer Lytton	<i>Not So Bad As We Seem</i>	Comedy
1851	Sir Charles Coldstream	Boucicault	<i>Used Up</i>	Comedy
1851	Mr. Gabblewig	Dickens	<i>Mr. Nightingale's Diary</i>	Farce
	(In addition to Gabblewig, Dickens played quick-change characters—a boots, an old woman, etc. See text.)			
1851	Colonel Freelove	Mrs. Kemble	<i>A Day After the Wedding</i>	Interlude
1854	The Ghost of Gaffer Thumb	Fielding	<i>Tom Thumb</i>	Burlesque
	(This was in juvenile theatricals at Tavistock House, when Dickens billed himself as "The Modern Garrick.")			
1855	Baron Dunover	Planché	<i>Fortunio and His Seven Gifted Servants</i>	Fairy Extravaganza
	(Again in children's theatricals at Tavistock House, Dickens being billed as "Mr. Passe.")			
1855	Aaron Gurnock	W. Collins	<i>The Lighthouse</i>	Melodrama
1857	Richard Wardour	W. Collins	<i>The Frozen Deep</i>	Romantic Drama
1857	Uncle John	J. B. Buckstone	<i>Uncle John</i>	Farce

のために公演を繰り返し、1857年1月にはプロの俳優をキャストに加えて公演し大成功を収めている。演劇活動に関しては同年7月と8月の公演が最後となり、以後は公開朗読に切り替わっている。一つには妻との離縁、そしてまた Gad's Hill に居を移したことも関係している。ともかく俳優あるいは演出家ならいざ知らず、ディケンズは作家として、また雑誌編集者として大活躍中の身であって、これらの演劇活動は気晴らしの領域を越えて、どこか彼の芸術に深く関わっているのではないかと考えられる。

一覧表は手に入ったものの、作品の在処を突き止めるには相当時間を費やした。これには Allandyce Nicoll, *A History of Early Nineteenth Century Drama 1800-1850* (Cambridge, 1930) および *The Player's Library: the Catalogue of the Library of the British drama League* (British Drama League, 1950) が大いに役立ったが、これと合わせて実際に作品を手に入れることに着手した。19世紀演劇集には *London Stage, 4 vols. (1824-1827)*, *The British Theatre, 25 vols. (1808)*, *British Drama Illustrated, 12 vols. (1864)*, *Cumberland's Minor Theatre (1828-1840)*, *Lacy's Acting Edition of Plays (1850-60)*, *Dicks' Standard Plays (1880s)*, *Richardson's New Minor Drama (1828-31)* があり、加えて Readex 社 (New Canaan, CT) 刊行のほぼ1万点にのぼる19世紀イギリス演劇脚本資料(マイクロフィッシュ)がある。上記一覧表のなかで、*Every Man in his Humour* とか *Merry*

Wives of Windsor は容易に手に入るが、*Tom Thumb* の場合、ディケンズは O'Hara による改作版を用いているので、これまた余分な時間がかかった。Boucicault の “Used Up” は *Plays by Dion Boucicault* (Cambridge, 1984) に掲載されており、“The Frozen Deep” は校訂を経たものが *Under the Management of Mr. Charles Dickens* (Cornell University Press, 1966) の書名で出版されている。しかし “The Lighthouse” だけはどこにも見当たらない。それもそのはずで、これは手稿の形でのみ存在し、Victoria & Albert Museum, The British Library, The New York Public Library の 3ヶ所に保存されているからだ³。ここでは大英図書館の手稿を利用した。ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の手稿とちがってコリンズの直筆ではないが、それだけに彼の悪筆に苦しめられることは少なかった。

テキストが入手したこと、それにディケンズが主演を演じて高評を博したこともあり、本稿では多くの上演演目の中から “The Lighthouse” を取上げ、彼の演劇活動が創作活動とどのように関わっているかを考察したいと思う。

テキストには場面を John Ruyard 建設の 2 代目エディストーン灯台、年代を 1748 年と記している。エディストーン灯台といえ、プリマスの西南沖合 22km にある岩島 (Eddystone Rocks) に建っており、ここは航海の難所として知られていた。初代の灯台は 1696 年、Henry Winstanley (1644-1703) の設計により木材と石を使って建設された。高さは 100 フィートに達し、60 本のローソクを点す大シャンデリアが光源となった。しかし真新しいこの灯台は、1703 年の 11 月、英国を襲った大暴風雨にのまれ、設計者が不死身であると宣言していたものの、もろくも崩壊して海の藻くずと消えた⁴。代わって再建されたのが 2 代目の灯台 (1706-1755) である。1748 年といえ、焼失する 7 年前である (ただしこの年代については、作品中に 7 年戦争の平和条約締結を受けて釈放された女性が登場するので、誤解を招きかねない)。

“The Lighthouse” (1855) は、Wilkie Collins (1824-1889) が *Household Words* (16 & 23 April, 1853) に寄稿した “Gabriel's Marriage” をもとに書いた戯曲である。後者は、フランスのキベロン半島における漁師でありカトリック信者である一青年の苦悩を描く短編である。彼は、父が臨終に際してしきりに繰り返すうわ言の中に、かつて人を殺めたことを聞いて動転し、この大罪を胸に隠したまま許婚との結婚に踏み切ることが絶対にできないと、苦悶するのである。

コリンズは、ディケンズから指示つきで脚本執筆の依頼を受けたのではないかと推量される。そうでなければ 1855 年の 5 月、ディケンズが脚本に目を通すなり上演を決定し、数日後にはロイヤル・アカデミー会員の Clarkson Stanfield (1793-1867) に舞台の背景画制作を依頼し、知人・友人に配役を割り振ると、すぐさま練習日程を組み、6 月中旬には上演開始にこぎつけるという離れ業を理解するのはむづかしい。ただ、コリンズからディケンズに宛てた手紙は一通も残っていない⁵ ので、執筆依頼を確認することはできない。一方、コリンズのほうは友人の Charles Ward 宛に「自分がはじめて戯曲に手を染めていること、しかもこの件は失敗した時のことを考えてしばらく内密にしておいてくれるように」と書き送って

いる⁶。脚本が届くまでは、ディケンズですらその完成を予測することはできなかったようだ。Tavistock 劇場（ディケンズ邸の子供勉強部屋）における上演については、ディケンズの手回しもあって多くの新聞・雑誌が高評を載せ、これを読んだ人々が是非見たいと思ったが、観客席が 25 席というのではとても要求に応えきれず、そこで 1 ヶ月後にケンジントンの Campden House で上演することを決定した。この成功を見たコリンズは、将来のプロ興行にそなえて脚本使用条件を定め、Benjamin N. Webster(1797-1882) に受け入れる用意があるかどうかを打診している⁷。このような事情を考え合わせると、脚本は、ほぼ、コリンズ一人の筆になると考えてよいであろう。

2 Aaron Gurnock の苦悶と解放

さて、“The Lighthouse”の開幕は、大暴風雨の場面である。11月19日以来4週間というもの、激しい嵐はいつこうに衰えを見せず、食料運搬船は Eddystone Rocks に近づくこともできない。3名の灯台守—父の Aaron Gurnock、息子の Martin、そして Martin の許婚の父親 Jacob—は疲労の限界に達し、食料も底をついて、生命の危機にさらされている。Martin は婚約して一年たち、すでに結婚予約の公布も終えて6週間後には結婚する予定である。一方、娘の父は快活そのもので、運搬船が出るとなったら娘の Phoebe が真っ先に乗り込んで君のところへやってくるさと、空腹も嵐の激しさも意に介さず、若き灯台守と楽しく語らっている。

そのさ中、父が苦しそうに Martin の名を呼ぶ。駆けつけると、まるで夢にうなされるかのように7~8年前のある秋の日のことを語り出す。その頃父は農場の経営が行きつまり、大きな負債をかかえていた。妻と Martin が親戚を訪ねた留守に昔の友人 Benjamin がやってきて泊まりこみ、借金のことやら、牢獄行き以外にどうにもしようのないきびしい時世を話題にしては沈みがちな日々を送っていた。そこへある晩一人の女性があらわれ、一夜の宿を乞うた。もてなしができないからと断ったが、眠るだけでいいから是非にと頼まれて、止むなく聞き入れた。ところがその晩、寝苦しさにもふと目を覚ましたところ、Benjamin が投宿した女性をナイフで刺し、持っていたカバンを取上げていた。ナイフの刃先からは血が滴り落ちていた。思案のあげく二人で死体を崖沿いに運び、海辺にある Daw's Cave に隠して、貝殻や藻くずで覆った。

Benjamin がいくら欲しいかというので、血塗られた金など要らぬと答えると、彼は荒野の彼方に走り去った。2日後、失踪した女性の捜索が警察の手で行われた。もちろん洞窟の中も調べたが、人影一つ見えなかった。彼女の召し使いが鉱山の堅穴の中で見つかったので、女主人はおそらく濃い霧のなかで足を踏みあやまり、崖から落下したのであろうと推量された。彼女を慕う人々がコーンウォールから続々と駆けつけ、死体を探しつづける。彼女は夫と死別してからというもの、喪服をまとい、領地の苦しめる人々を見舞っては金品を与えていたらしい。名を Lady Grace といった。

途切れ途切れの恐ろしい話に血の凍る思いをしていた時、部屋の外から Jacob の声がして、食料運搬船が嵐を乗り切って到着したと告げる。それと同時に Phoebe が勢いよく Martin のもとに走りよる。しかし、父から殺人幫助の話聞いた直後の彼には、Phoebe に会っても素直に喜べない。心はどこかをうつろにさ迷う。彼女は父に Martin の様変わりを語り、Aaron に原因を尋ねる。

このとき警鐘が鳴り、航行中の船が岩礁に乗り上げ難破しそうだとの知らせが灯台中を駆け抜け、居合わせた人々は全員、救助体制につく。Phoebe が船尾に目を凝らすと 'The Lady Grace' の文字が見える。これを聞いた Aaron は驚愕する。

場面変わって第二幕は、屈強の船乗りたちが遭難者の救出に成功して喜びはしゃいでいる。救助された女性は Phoebe の看護を受けてぐっすり眠ったあと、まもなく衣装をととのえて姿を見せる予定である。一方 Martin はというと、"Oh ,that secret! That shameful ,fearful secret!" と自らを呪い、誰が呼びかけても答えない。Jacob が「まるで私の娘を娶るのを恥じているかのようなのではないか」と詰め寄ると、Martin は「Phoebe はきっと自分を夫として受け入れることを恐れるはずですよ」と答える。そして「仮にある人が罪を犯し、いま一人がその人の責任回避に手をかしたとすれば、法はその人を罪人とみなし罰を与えるでしょうか」と尋ねると、的外れの質問といい、依然とは打って変わった態度といい、Martin の変貌に Jacob は途方に暮れる。だが娘の幸せを祈る父は、もはや優柔不断な態度に耐え切れず、Martin に 30 分以内に白黒をはっきりさせよと迫る。Martin は苦渋の色を濃くする。

息子の苦悩を尻目に、事態の好転を見た Aaron はすっかり元気になっている。Martin は昨夜聞いた話を何度も切り出すが、父は取り合おうとしない。「ベッドから降りてここに座り込んだでしょう。そしてこぼれた水の滴りを血の滴りだといったでしょう」というと、そんなことは身に覚えがないと断言し、「私を疑う気か」と気色ばむ。Lady Grace 殺害と Daw's Cave に死体を隠した件を話すと、父はこれを戯言として一蹴する。ちょうどそこへ Lady Grace が 100 年前に流行った服装であらわれ、気付かれぬまま Martin と Aaron の間に割って入る。"False" と声高に述べる Aaron に、背後から Lady Grace が "True!" と答えると、振り向いて何者かを認めた Aaron は仰天し「お赦してください。あなたが昨夜あらわれ『事の次第を述べよ』とおっしゃいましたので私は述べました。なぜまたここにあらわれて、私がうそを考え、うそを述べているとって驚かすのでしょうか。ああ、お赦してください。さきほど嘘だと言ったとき、私が神様にどれだけ試されたかは、もうおわかりでしょう。恥ずかしくも、息子の目の前で私の罪が暴露されたのです。ああ、息子に軽蔑されるのがわかっていながら真実を語らなければならぬのは辛いものです。お助け下さい。後悔しています。」

こう述べた時、Lady Grace は Aaron に近づき、「触ってご覧なさい。私はあなたと同様、生身の人間です」と言い、「私を救ってくださった神様は、あなたをも殺人の罪から救ってくださいます」と述べる。Aaron は気絶する。

その後の身の上に関して、彼女は Martin にこう語った。洞窟内に立ち寄った海賊に見つけられ、船で運ばれていたところを、船もろともフランス船に拿捕された。時あたかも 7 年

戦争のはじめで、深傷を負ったうえ流罪の生活を強いられて苦しかったが、捕虜となったイギリス人の世話をしたり、病人の看護をしているうちに平和条約が成立し、ようやく帰国の途についた。しかし昨夜の大暴風で船は難破し、自分は他の乗員とともに助けられたのだと。それから彼女は Martin に向かい、「あなたがなぜ結婚を思いとどまっているのかを聞きました。あなたはまことの心をお持ちです。あなたの信義と勇気は報いを受けます。私には他の誰よりも申し上げる権利があると思いますので、私から申しましょう。あなたは良心の咎めなく Phoebe と結婚できます。あなたが二人の幸せを私は生涯心にかけることを約束します」と述べた。この時 Aaron がようやく意識をとり戻し、赦しを請うと、婦人は手をさしのべ、“The privilege of forgiving...is a right that we may all insist upon.”と述べて、これを赦す。しかして一同は船で岸に向かい、大団円となる。

上演の見どころは、餓死に瀕した Aaron が朦朧とした意識の中で何かに怯えるように、心に隠した過去の罪状を語る場所である。Jacob が卓上にこぼしたコップの水を見て血だとばかり思い込み、“there’s the place where he put the knife—there was blood on the blade, and a drop dripped off it.”と殺害の現場を生々しく再現する。Martin は父の形相、仕種に体をこわばらせる。そしてこれにつづく打ち明け話を、Aaron に扮するディケンズは完璧な演技でおこなう。また、救助船の到着した第 2 幕では、前夜の打ち明け話をことごとく否定し、息子の追及を退けるが、大胆に見える言葉と行動のはしばしに良心の疼きがあらわれ、これを少ない動きの中で演じきる。だが、Lady Grace を目にして欺瞞はひとたまりもなく露見し、失神した彼がやがて徐々に意識を回復してゆく様が神技に近い形で演じられる。

観客席でこれを見たかつての俳優 Mrs. Yates (1799-1860) は、芝居が終るなり目を真っ赤にはらしながらディケンズのもとへ駆け寄り、こう述べた。

“O Mr. Dickens what a pity it is you can do anything else!”⁸

この道に邁進してくれればよかったのに、なぜ他の職業を選んだのかと言わぬばかりの、ディケンズの演技を要約する名言である。

3 上演の創作への波及

ディケンズは 1855 年の 1 月、次の小説(“Nobody’s Fault”)についての構想を温めていた。前年にはロンドンの衛生問題、特に労働者への良質な住宅を政府が提供することの必要性を説き、また上下水道の整備に着手することを *Household Words* 誌上で強く訴えていたが、下院はそうした改善策を推し進める法案を否定し去り、今年に入ってから、クリミア戦争における政府の対応の緩慢さと相つぐ失態を見てディケンズは業を煮やした。彼は“The Thousand and One Humbugs”という記事を *Household Words* に連載し、パーマストン内閣をこっぴどく批判し、ひたすら行政改革を促そうと試みた。しかし政府は、依然、へつらいや世辞をうけ入れ、無能者を重要ポストに任命して、改革に踏みだそうとはせず、それ

ゆえにディケンズはこうした官僚機構の腐敗をどのように作品中に反映させるかに悩みつづけていた。

1855年5月、ディケンズは“Nobody’s Fault”執筆にとりかかるが、重苦しい政治批判を前面に出せば出すほど筆はすすまない。前作の月刊小説では、開巻章に重厚な社会批評を配して成功を見たので、今回の作品では、それにもまして急進的な社会批評を展開したいと考えた。それだけに作品の全体構想がまとまらず、開巻章にずいぶん手子摺っている。そこへコリンズから新しい脚本が届いた。出来はいいし、行き詰まりの打破にうってつけの気晴らしとばかり、すぐさま上演に飛びついた。プロログを一気に書き上げ、同時にほぼ30年以上も前に読んだ「グロヴナー号」難破の物語を歌詞に仕立て上げ、芝居のなかでPhobe役をやる娘のMaryに歌わせることにした。

これは、アフリカ沖で難破し助かった東インド会社の乗組員が、同じく助かった7歳の子供を連れて喜望峰まで陸路を旅するのであるが、道々悲惨な目に会い、ついには子供を死に至らしめる悲しい物語である。ディケンズが子供の時に読んで心を打たれた物語であった。歌詞は芝居のチラシに掲載されているが、ここに転載してみよう。ディケンズが音楽の選択やチラシの制作にいたるまで気を配り、演出の見せ場を作る一例である。

THE SONG OF THE WRECK.

I

THE wind blew high, the waters raved,
A Ship drove on the land,
A hundred human creatures saved,
Kneeled down upon the sand.
Three-score were drowned, three-score were thrown
Upon the black rocks wild;
And thus among them left alone,
They found one helpless child.

II

A Seaman rough, to shipwreck bred,
Stood out from all the rest,
And gently laid the lonely head
Upon his honest breast.
And trav’ling o’er the Desert wide,
It was a solemn joy
To see them, ever side by side,
The sailor and the boy.

III

In famine, sickness, hunger, thirst,
The two were still but one,
Until the strong man drooped the first,
And felt his labours done.
Then to a trusty friend he spake:
“Across this Desert wide

“O take the poor boy for my sake!”
And kissed the child, and died.

IV

Toiling along in weary plight
Through heavy jungle-mire,
These two came later every night
To warm them at the fire,
Until the Captain said one day:
“O seaman good and kind,
“To save thyself now come away
“And leave the boy behind!”

V

The child was slumb'ring near the blaze:
“O Captain let him rest
“Until it sinks, when GOD's own ways
“Shall teach us what is best!”
They watched the whiten'd ashey heap,
They touched the child in vain,
They did not leave him there asleep,
He never woke again.

ディケンズは、この歌詞を George Linley (1798-1865) 作曲の “Little Nell” (バラッド) の節まわしでメアりに歌わせた。“Little Nell” とは、もちろん英米の読者を涙にくれさせた *The Old Curiosity Shop* (1840-41) から生まれてきたものである。リハーサルと本番でこれを耳にしているうちに、この歌の余韻が、ほどなくディケンズにインスピレーションを与えることになった。そして新小説の題名が “Nobody's Fault” から “Little Dorrit” に変更されたのである⁹。作品全体を統括する象徴的存在が可憐なる女主人公 Little Nell によって触発され、ディケンズをこれまでの政治批判から、より高次の人間および人間社会の分析へと向かわせることになった。これが9月の半ば、そして12月には *Little Dorrit* の第1分冊が出版されるのである。

5月11日にコリンズより原稿を受取ると、すぐさまスタンフィールドに舞台背景を描いてもらい、脚本をキャストに配布し終わると、リハーサルを6月2日(土) 4日(月) 5日(火) 7日(木) 8日(金) 11日(月)に組んだ。14日に舞台ができあがると、15日には召し使いや出入りの商人に演劇を披露し、16、18、19の3日間、特別に招待した人々を前に芝居を演じた。出席した人々は、出演する Charles Dickens (1812-1870), Frank Stone (1800-1859), Augustus L. Egg (1816-1863), Mark Lemon (1809-1870) およびその家族に加え、次のような名士が顔を揃えた。

引退した元俳優の Elizabeth Yates、弁護士・ジャーナリスト・演劇作家の Gilbert à Beckett (1811-1856)、ジャーナリスト・小説家の Edmund Yates (1831-1894)、俳優 Eliza Becher (*née* O'Neill, 1791-1872)、画家 Clarkson Stanfield, R.A. および David Roberts, R.A. (1796-1864)、友人の John Forster (1812-1876)、Thackeray & Daughters, John Leech

(1847-1864)、Douglas Jerrold (1803-1857)、Thomas Carlyle (1795-1881)、それに Queens Bench の首席裁判官である Lord Campbell (John Campbell, 1779-1861)である¹⁰。 Duke of Devonshire (William G. Spencer Cavendish, 1790-1858) にはディケンズが直々に招待状を出したが病気ゆえに出席はかなわなかった。

“The Lighthouse” は観衆に深い感動をあたえ、イエイツ夫人のように観客はひどく泣きはらしたようである。ディケンズの演技は神技に近く、それを Mrs. Cowden Clarke は次のように記している。

...A wonderful impersonation was this; very imaginative, very original, very wild, very striking; his grandly intelligent eyes were made to assume a wandering look,--a sad, scared lost gaze, as of one whose spirit was away from present objects, and wholly occupied with absent and long-past images.¹¹

“The Lighthouse” は同年 7 月 10 日、5 つの日刊、10 の週間新聞に大きく宣伝をしたあと Colonel Waugh の邸宅 (Campden House) でボーンマスの結核患者療養施設の募金活動のために演じられた。チケットは 1 ギニ、大勢の観客を迎え、大成功を収めた¹²。2 年後には「オリンピック劇場」で 8 月 10 日から 10 月 17 日まで Messrs. Robson & Emden の手で上演され、もちろん、プロの手並みはずばらしかったが、観客がディケンズの演技を知っているので、Aaron 役の Stuart Robson (1836-1903)はディケンズに負けず劣らぬ演技を見せるのが大変であったらしい。しかしさすがはプロの俳優、みごとな演技であったという¹³。

ともかく、“The Lighthouse” はディケンズにとって華麗な気晴らしになったし、その上、新しい小説に象徴的な枠組みを提供するきっかけを作ったのであった。

注

1. T. E. Pemberton, *Dickens and the Stage* (London: George Redway, 1888), p.134.
2. F. Dubrez Fawcett, *Dickens the Dramatist on Stage, Screen and Radio* (London: W. H. Allen, 1952), pp.255-256 に一部加筆を施した。
3. *The Letters of Charles Dickens*, Vol. (The Pilgrim Edition) (Oxford: Clarendon Press, 1993), p.616n.
4. Elinor De Wire, “England’s Great Storm”, *Weatherwise*, 96 (49):34-37.
5. Kenneth Robinson, *Wilkie Collins* (1951; London: Davis-Poyater Ltd., 1974), p.69.
6. *Ibid.*, p.84.
7. *Ibid.*, p.85.
8. Letter to Burdett Coutts, dated 19 June 1855 (*Letters*, Vol. , p.650)
9. Peter Ackroyd, *Dickens* (London: Sinclair-Stevenson, 1990), p. 743.
10. Edmund Yates, *Edmund Yates: His Recollections and Experiences*, vol. 1 (London: Richard Bentley and Son, 1884), pp.279-80.

11. Pemberton, p.128; J. B. Van Amerongen, *The Actor in Dickens* (1926; Haskell House, 1970), p.24.
12. "Charles Dickens's Acting in 'The Lighthouse'," *Dickensian*, 5 (1909): 91-94; Letters, VII, p.665.
13. Henry Morley, *The Journal of a London Playgoer* (1866; Leicester Univ. Press, 1974), p.162.

